



## 最後の約束

高岡市民病院

やまだ えり  
山田 愛莉

Sさんは、十二指腸癌の方で病院に入院してきたころにはもう治療の施しようもなく、緩和治療が行われることになりました。終末期の患者さんを受け持つのは初めてのことでした。

ある日の夜勤で担当になり挨拶にいくと、Sさんは窓際を向いたままベッドで休んでおられ傍らで奥さんが今にも泣きそうな顔をされていました。Sさんはその日、内視鏡の治療予定で、ステント留置して食事が開始されるはずでした。癌が進行しており、ステント留置ができず今回は鼻から胃管が入っていました。奥さんは私の顔を見て震える声で「看護師さん…」と涙を流されました。返す言葉も見つからないまま私の頬を涙が伝いました。言葉を交わすことなく2人で手を握りしめ涙しました。Sさんは何も言わず窓際を向いたままでしたが、Sさんの背中が小さく震えていたのがわかりました。深夜の巡視のとき、Sさんの部屋の前で静かに深呼吸してからドアを開けました。するとベッドに座ったSさんが「やっぱあかんかったわ」と呟やかれました。その笑顔は、苦しそうに見えました。

父のように頼りがいのあるSさんのかぼそい声を聞いて、また泣きそうになりながら何も言えずにSさんのやせた背中をさするだけでした。

数日経って、Sさんは緩和ケア病室に転室になりました。なぜかSさんの存在が気にかかり、勤務帰りに数回Sさんの病室を訪れていました。いつものようにSさんに会いにいくと「山田さん来てくれてありがとう、あなたにはほんとに感謝しとる。握手しよう」と言われた。「私こそ、感謝しています。」と自然と握手していました。Sさんの少し浮腫んだ手がとても温かかったことを覚えています。「山田さんに会うのもこれで最後。もう二度と会えん。お願いがあつてね。私はもうすぐ死ぬから…私のこと時々でいいからこんな親父おったなって思い出してくれ。それで十分や」と言われました。私は、また耐え切れず涙してしまいました。Sさんは目にいっぱい涙をためて「さ、これで行きなさい。仕事疲れたやろ。気をつけて帰るんだよ」と言ってくださいました。

後日、Sさんが自宅で亡くなられたことを知りました。Sさんは最後まで弱音をはくこともなく、それどころかいつも私を励まし勇気づけてくれた父のような存在でした。私は、Sさんとの最後の約束を絶対に忘れません。